

〈資料紹介〉

市立函館博物館所蔵「椎久コレクション」 －八雲アイヌの民族資料とアイヌ語音声－

大矢 京右
大野 徹人

- 目次
1. はじめに
 2. 椎久コレクション来歴
 - 2-1. 椎久年蔵
 - 2-2. 函館博物館と椎久コレクション
 3. 椎久コレクション概要
 - 3-1. 椎久きみ氏寄贈資料（1966年）
 - 3-2. 購入資料他
 - 3-3. 椎久健夫氏寄贈資料（2011年）
 4. 椎久年蔵肉声記録
 - 4-1. 解説
 - 4-2. 本文
 - 4-3. 資料の評価
 5. むすびにかえて

キーワード：椎久年蔵、椎久トイタレキ、椎久コレクション、アイヌ語八雲方言、更科源蔵

1. はじめに

かつて蝦夷地と呼ばれた北海道には、多くのアイヌが居住するとともに、本州から渡ってきた和人も混住していた。特に道南地域は早くから和人が多く移住してきた等の歴史があったため、伝統的な生活を営むアイヌの集落は相対的にいち早く減少したと言える。従って、北海道南部で収集されたことが判明しているアイヌ資料は全国的にも極めて稀で、その一部が市立函館博物館に収蔵されていることもあまり知られていないのが現状である。

本稿では市立函館博物館が所蔵する椎久家旧蔵アイヌ資料（以下「椎久コレクション」）について、文献調査および聞き取り調査等をおして判明した事実とともに紹介し、今後の道南アイヌ研究の礎とするものである。

なお、本稿の1～3および5、添付の資料リストおよび凡例、図版、ライフヒストリーについて

は大矢が、4については大野が担当し、両名による確認・協議の上で大矢が全体を編集した。

2. 椎久コレクション来歴

2-1. 椎久年歳

市立函館博物館が所蔵する椎久コレクションは、八雲町遊楽部川流域^{ゆうらつぶ}に居住していた椎久家が旧蔵していたアイヌ資料群であり、椎久年吉氏（エカシトム Ekastom : 1853-1926）・タエ氏（シヨッキタイェ Sotkitaye : ?-?）の次男である椎久年蔵氏（トイタレキ Toytareki : 1884-1958）が当主であった時代に所持されていたもので構成されている。¹

椎久年蔵氏は、ユーラップアイヌの首長として集落のアイヌのまとめ役であった。生業は半農半漁であったが鉄砲も上手であり、尾張徳川家第19代当主徳川義親氏（1886-1976）が八雲で熊狩りを行う際には、自ら村田銃を持って同行している。【学習院大学資料館1997】また八雲地方のアイヌ文化に関する伝承者であったとともに、アイヌ語八雲方言の数少ない話者でもあったことから、1930年代には大飼哲夫氏や名取武光氏、児玉作左衛門氏といった北海道帝国大学の研究者に協力し、晩年には更科源蔵氏や知里真志保氏といった民族学や言語学の研究者らが頻繁に同氏の元を訪れていた。【服部1964など】



椎久年蔵（トイタレキ）氏
【椎久健夫氏所蔵】

1908年には虻田から妻ハツ氏（1887-1916）を迎えて2男3女をもうけたが死別し、1930年にきみ氏（1895-?）を新しく妻として迎えた。年蔵氏が1958年に死去した後、長男堅市氏が椎久家当主となったが、椎久コレクションは妻きみ氏に引き継がれている。

2-2. 函館博物館と椎久コレクション

椎久きみ氏に引き継がれた椎久コレクションは、32件47点が函館博物館へ1960年4月に寄託され²、1966年4月に函館博物館本館が落成したのを受けて、同年11月27日付で32件47点の寄託資料および丸木舟1件1点の合計33件48点が寄贈となった。これらは博物館で整理分類された上で48件54点として『市立函館博物館蔵品目録民族資料篇』に掲載され、またこれら寄贈された資料群とは別に、古物商などから椎久家伝来の資料として博物館が購入した資料なども存在しており、合わせて55件61点の資料が市立函館博物館所蔵椎久コレクションとして認知されている³。



椎久きみ氏からの寄附申込書と資料内訳
【市立函館博物館所蔵】

函館博物館に納められた椎久コレクショ

ンには1～44の通し番号がつけられ⁴、各資料に対応する小型の資料カードが作成されるとともに、「シイクNo. (通し番号)」と書かれたシールラベルを資料に貼り付けた上で管理・保管されていた。椎久コレクションは博物館の受入当時から大きな注目を集めていたようであり、1965年2月21日付読売新聞(北海道版)には、美術工芸品の堤コレクションや考古資料の能登川コレクションなど(いずれも函館市指定有形文化財)と並んで、「八雲アイヌの大しゅう^(ママ)長椎久年蔵氏が集めたアイヌ資料」が函館博物館の「貴重な資料」【読売新聞1965】として紹介されている。また、新規開館した函館博物館の北方民俗室(現在の第3展示室)では椎久コレクションが民族資料の目玉として展示され、1969年に開催された企画展「北方民族展－アイヌ服飾とアイヌ絵を主とした－」においても椎久コレクションの色裂置文衣が展示されるなど、椎久コレクションは同館所蔵民族資料の欠くべからざる存在であったといえよう。



椎久コレクションの碗の裏面に貼られたラベル
【市立函館博物館所蔵】

3. 椎久コレクション概要

3-1. 椎久きみ氏寄贈資料(1966年)

前述のとおり、1966年に椎久きみ氏から寄贈された椎久コレクションは48件54点であり、そのうち41件45点が酒器や太刀、刑罰棒などといった儀礼・信仰用具に占められる。ただし、このうち「刀綬」2件2点についてはシールラベルおよび資料カードともに欠落しているため、収蔵資料からの同定が困難な状況である。また丸木舟1件1点に関しては、函館博物館所蔵資料に当該資料と思しき資料が2点(丸木舟(民族0757)、丸木舟(民族0758))確認され、どちらが椎久コレクションであるかについては確たる記録は残されていないものの、その形態などから丸木舟(民族0757)

¹ これらの人名のアイヌ語表記は、【服部1964】の記述を元としている。なお、椎久氏のアイヌ名を「トイタレケ」「トヨタレケ」などと表記している文献もあり、椎久氏の地元での通称が「トヨ(さん)」だったのでその名前で紹介している文献もある。

² 1960年8月17日付北海道新聞(道南版)に「4月に八雲のアイヌしゅう^(ママ)長の子孫から同博物館(函館博物館:筆者注)に寄贈された椎久コレクション」【北海道新聞1960:12】との記載があり、1958年に椎久年蔵が死去した後この時期に椎久コレクションが函館博物館納められたことがわかる。また、1966年11月27日付椎久コレクション寄贈申込書の文面から、1960年の受入当初は「寄贈」ではなく「寄託」扱いであったこともわかっている。

なお、どのような経緯で函館博物館に寄託・寄贈されたかについては不明である。

³ なお、市立函館博物館には馬場脩氏(1892-1979)が収集した国指定重要有形民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」(通称「馬場コレクション」)750件が収蔵されており、その内12件12点が八雲で収集された資料として確認される。これらが椎久家に関連するものかどうかは記録がないが、馬場氏が八雲を訪れたのが学生時代の1910年と研究に専念していた1936年であったことを考慮すると、おそらく1936年に収集されたものであると推測されよう。そして1936年に八雲を訪れた馬場脩氏は首長であった椎久家を訪ねており、【馬場1979:34】「(椎久氏の)家には僅に十数点程の土俗品が壁に飾られていただけで、これがこの村を代表する彼らの唯一の宝物」【馬場1971】であったことを述懐していることから、馬場氏が八雲で収集したアイヌ資料は椎久家旧蔵資料である可能性がある。

⁴ 丸木舟には通し番号がつけられていないことから、寄託時につけられたコレクションの通し番号であると類推される。

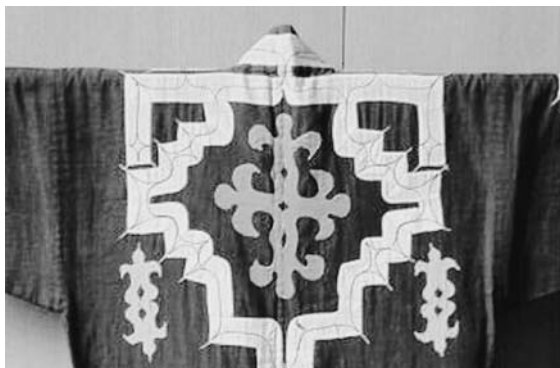
が該当すると考えられる⁵。

これら寄贈資料の特徴としては、前述した儀礼・信仰用具が大部分を占めているという点と、サイモン用具(民族0729)や数取り(民族0730)といった他のコレクションには見られない稀少な資料が含まれている点が挙げられる。サイモン用具は熱湯の中に入れて罪を犯した者に取り出させるいわゆる盟神探湯^{くがたち}で用いられ、蝦夷島奇観の中にも「サイモンと云事を行へり」という文章とともに図解してある。また数取りについては、1955年12月10日に椎久年蔵氏から聞き取り調査を行った更科源蔵氏が、「(椎久家の)床の間に盆にのせられた、木の曲がったのが置いてある。ポンフンペ^{ノカ}形^{ノカ}とって、オットセイを十頭とると、これを一つつくて、漁が終わったあとに、浜の祭壇^{ビシユヌサ}におさめるのであるという。」【更科1970:230】と書き残している。

なお写真資料ではあるが儀礼用の狼頭骨(民族0001)は、現在国内では新ひだか町静内郷土館所蔵の現物資料しかその存在が確認されていないことから、大変貴重な資料であると評価できる。この写された狼頭骨の原物については詳細不明であるが、椎久年蔵氏が犬飼哲夫氏に招かれて北海道帝国大学でイオマンテを執り行ったのと、「アイヌノ祀レルモノ」として同大学に狼頭骨2点が納められたのがどちらも1933年であったことを考えると、この写真資料の原物が同大学所蔵資料であった可能性は高い。しかし残念なことに、北大の狼頭骨は戦後に削り掛けが取り去られてクリーニングされてしまい、現在往時の姿を目の当たりにすることはできない。【沖野2005】

3-2. 購入資料他

市立函館博物館所蔵の椎久コレクションのうち、購入資料および収蔵経緯不明資料は、3着の色裂置文衣(民族0026、民族0027、民族0028)と首飾り(民族0086)、耳飾り(民族0101)の合計5件5点であり、全て服飾品である。そのうち2着の色裂置文衣(民族0027、民族0028)と首飾り(民族0086)は、椎久家伝来ということで1963年に古物商等をとおして購入された資料であるが、色裂置文



色裂置文衣(民族0027)の背中部分
【市立函館博物館所蔵】



ロシア民族学博物館所蔵魚皮衣(2806-98)の背中部分
【(財)アイヌ文化振興・研究推進機構2009:64】

⁵ 丸木舟(民族0758)は、舳先の破損状況等を基に1956年6月20日付北海道新聞の掲載写真と比較し、1956年5月7日に古物商を通して6,500円で購入したものと考えられる。なお旧蔵者は「八雲町ユーラップの山奥に住むアイヌ」【北海道新聞1956】とされており、椎久家との関連は不明である。

⁶ 椎久幸子氏によるご教示(2010年8月11日聞き取り)。

⁷ 同資料は椎久コレクションの通し番号が付与されているが、1966年の資料寄贈時に添付された資料一覧に該当するものがない。

衣（民族0026）と耳飾り（民族0101）については、八雲で収集された資料であるということが判明しているものの、入手先等収蔵の経緯が不明な上、椎久家伝来の資料であるという確証はない。ただし前者は函館博物館の資料登録カード上で椎久コレクションの一部である旨明記されており、文様の形式などからも椎久家の誰かによって作製された可能性が高い⁶。また後者は函館博物館の椎久コレクション通し番号が付与されていることから、椎久家のものであった可能性があると考えられる⁷。

これらの資料のなかでも、色裂置文衣（民族0027）は実際に椎久年蔵氏が着用している写真が複数残されている貴重なもので、その独特な文様からも椎久コレクションを代表する資料として広く認知されている。この文様は樺太先住民族の魚皮衣の造作とも類似しており、椎久家の口伝によると、椎久家の祖先の中に樺太か千島から移住してきた者がいたらしいとのことであった⁸。

3-3. 椎久健夫氏寄贈資料（2011年）

2011年、函館市北方民族資料館⁹で市立函館博物館所蔵椎久コレクションを中心とした収蔵・企画展「渡島半島のアイヌ民族資料－椎久家旧蔵資料展－」を開催することとなり、椎久年蔵氏のご子孫である社団法人北海道アイヌ協会八雲支部椎久健夫支部長にご挨拶するとともに、同氏が所蔵する資料の借用をお願いした。同氏からは椎久年蔵氏の写真や日記帳、徳川義親氏から椎久年蔵氏に贈られたペーパーナイフなどの貴重な資料の貸し出しを快くご了承いただき、椎久家の家系や遊樂部アイヌの丸木舟の特徴など貴重な情報のご教示もいただくことができた。

そして収蔵・企画展開催期間中には椎久家の本家の仏壇からカセットテープが発見され、本家の方が試聴したところ椎久年蔵氏の肉声が吹き込まれていることが確認されたとのことで、収蔵・企画展開催中の函館市北方民族資料館に持ち込まれた。同館ではご子孫の許可をいただいた上でデジタル化した肉声記録を展示会場で流し、収蔵・企画展終了後に新たに発見された椎久年蔵氏使用の村田銃とともに市立函館博物館へ寄贈の運びとなったのである¹⁰。

村田銃は徳川義親氏との熊狩りの際に使用されたものと考えられ、「アイヌが使用した近代的な道具」については博物館資料としてあまり類例が見られないことから、貴重な民族資料であると評価できる。また肉声記録についても、現在話者が確認されていないアイヌ語八雲方言の貴重な記録であり、言語学上きわめて貴重な資料であると評価できる。なお特に椎久年蔵氏の肉声記録については、その全文を以下に紹介することとする。

4. 椎久年蔵肉声記録

4-1. 解説

以下は、椎久家に所蔵されていた録音テープに収録されていた、アイヌ語による歌謡や祈り言葉、日本語による解説や言い伝え、日本語による民謡などを文字化したものである。聞き手の更科源蔵

⁸ 椎久健夫氏（椎久年蔵氏の次男：賢二氏のご子息）によるご教示（2010年8月11日聞き取り）。

⁹ 1989年に旧日本銀行函館支店を改装して開館した函館市立の資料館で、市立函館博物館が所蔵する民族資料を収蔵・展示している。

¹⁰ この際に寄贈いただいた肉声記録は、デジタルデータである。

氏や、同席していた地元の方と思われる方たちによる質問・発言も含んでいる。日本語による説明や問答も民族誌的に重要な情報を含み、当時の調査の様子、椎久氏の人柄についても伺える貴重な資料と思われるので、できるだけ文字化して紹介することにした。

録音の年月日については記載がないが、テープの中で椎久氏に質問している男性の声は明らかにアイヌ文化研究者の更科源蔵氏のものであり、更科氏の著作の『アイヌと日本人』に、更科氏が八雲を訪れた際の調査の様子をかなり詳しく記述している。訪問年月日は1955年12月10日および11日、1956年3月24日および25日である。

一方、弟子屈町立図書館に所蔵されている、更科氏が、各地での調査の記録をまとめた手稿『コタン探訪帳』の内容を、北海道立北方民族博物館学芸員(当時)の齋藤玲子氏が紹介しておられる。それによると、更科氏の八雲での調査は上記の記録とまったく同じ日であり、それ以外の日に更科氏が八雲で調査を行ったという記録はない。【齋藤2002】そこに書かれている調査の内容とテープの内容は合致しているので、この録音は、更科源蔵氏が1955年もしくは1956年に調査した際に録音されたものであるとほぼ断定していいと思われる。

ただし、このテープに収録されている一連の録音は、すべて同じ日に録音されたかどうかは分からない。それぞれの演目は違った日に録音されたかもしれないが、それぞれがどの日に録音されているかは特定できていない。更科氏の『アイヌと日本人』『コタン生物記』『アイヌ文学の生活誌』『アイヌ伝説集』などの著作を見ると、この時の調査で得られた情報をもとにしたと思われる記述が多数見られる。

録音者は不明であるが、考えられる可能性としては、更科氏本人、椎久氏もしくは椎久氏の家族、もしくは調査に同席した第3者となる。更科氏の『アイヌと日本人』によると、1955年と1956年の調査の際、更科氏はそれぞれ農協および役場の職員とともに椎久氏のもとを訪れている。もしかしたらその同行した人が録音したものかもしれない。

また、北海道開拓記念館に更科氏録音の音声テープが141点所蔵されていることが分かっているが、「収集地は、渡島半島地方(道南部)をのぞく北海道全域」【北海道開拓記念館1990:28】であるとのことなので、八雲での録音は含まれていない可能性がある。なお『アイヌと日本人』には、録音機を持参して録音したことを裏付けるような記述は見られない。

今回は更科氏の遺稿やテープなどと照合することによる確認作業はできなかったもので、今後の課題として考えたい。なおテープの聞き取りについては、甲地利恵氏から不明点の解釈、誤りの訂正などについて有益な指摘を多数受けた。

4-2. 全文

[凡例]

- アイヌ語のローマ字表記は現在通用している音素表記とし、カタカナ表記については、北海道ウタリ協会発行のアイヌ語教本『アコロ イタッ』に準拠しつつ、カタカナ表記については、実際の音声を反映し、有声音などはその通り表記した。
- 日本語の説明や歌において「一つ」を「ひとち」と発音するなど、アイヌ語話者によく見られる日本語の発音が多々見られるが、それは日本語の表記に反映させていない。

○椎久氏と調査者の更科氏やその他の人たちの間に質問の応答などのやりとりがある箇所については「椎久：」「更科：」などの形で発言者が分かる形にした。それ以外はすべて椎久氏による言葉である。

4-2-1. イモの歌

座り唄でなく、踊り歌のようである。八雲地方でこの踊りおよび歌をどう呼んだかは分からない。ほぼ同じ歌が長万部で録音されている¹¹。また、似た歌が座り歌の形で千歳でも伝承されている。

【日本放送協会1965:342】

椎久：いつの世のことだか自分としては分かりませんが、イモの歌が一つ残って、記憶しておりますので…

更科：イモって、そのあれですか…

椎久：イモ。

更科：あの…

椎久：馬鈴薯。

更科：馬鈴薯ですか。ははあ。

椎久：馬鈴薯芋のことです。

更科：ほう…。

イモ モシリ カ タ ヤンケ

イモを陸にあげなさい

imo mosir ka ta yanke

ホレ ウッ ワ ヌカラン

さあとって見なさい

hore uk wa nukar yan

ホレ ウッ ワ ヌカラン¹²

さあとって見なさい

hore uk wa nukar yan

(同じ歌をもう一度繰り返す。)

椎久：これ、何回でもおんなじこと大勢して合唱する。

更科：そして、その…やはり…

椎久：踊るんだ。こうやって（手を叩きながら）。

更科：ああ。そうですか。

¹¹ 1957年に北海道放送（HBC）が録音したと思われるテープを、登別市の市民団体「知里真志保を語る会」が舞踊家の内山綾子氏より譲り受け所蔵しているものである。【小坂2011:64-66】演唱者は、橋場ソワ・司馬ハル・知気ミネの諸氏である。

¹² このあと2回同じ歌を歌っているが、ホレ ウッ ワ ヌカラン hore uk wa nukar yan は一度しか歌っていない。

イモ モシリ カ タ ヤンケ

イモを陸にあげなさい

imo mosir ka ta yanke

さあとって見さいな¹³

(日本語)

SAA TOTTE MISAINA

ソコチノ ソイ ソイ¹⁴

sokocino soy soy

サラブチ カン カン

sarapuci kan kan

トコ ハイ ハイ

toko hay hay

(アイヌ語の歌詞をもう一度繰り返す)

椎久：こういうようなもんでね。

更科：ああ。そうですか。これは面白いですねえ。

椎久：いつのことだかねえ。

更科：そうですねえ。イモ入ってからの歌ですね。

椎久：うん。イモ、コタンに入ってからとってみなさい、さあ、ウッ ワ ヌカラン *uk wa nukar yan* というのは取ってみなさいという…。初めてイモという植物が、見た時のことを、歌になったと思います。ええ。

更科：はあはあはあ。春、ヤブマメ掘るとか、なんかの時の歌はないですか？

椎久：あれは、それもありましたけども、自分がやったことないから…。

更科：ああ。そうですか。そうですか。

椎久：あれは…エハタ *ehata*¹⁵ [ヤブマメ掘り] …エハタウポポ *ehata-upopo* [ヤブマメ掘りの歌] というのがあったように思うんだが…。

更科：ああ。女の人ですよね。それやるの。

椎久：女の人たちがよくやったと思ってます¹⁶。

更科：それから…あの…マイタケとる時なんかなかったですか？

椎久：マイタケ…カルシ *karus* [キノコ]、カルシウポポ *karus-upopo* [キノコの歌] だか、カルシリ ムセ *karus-rimse* [キノコの踊り] っのがあるんだけど、自分がやったことないもんだから。

更科：やったことないですか。ああ。そうですか。

¹³ 長万部や千歳の類歌では、こちらの日本語の歌詞が歌われている。日本語とアイヌ語は意味が対応している。

¹⁴ 以下3行は意味のないかけ声と思われる。日本語起源らしい言葉も見られる。

¹⁵ この植物の名称は地方により異なるが、八雲をはじめ、隣の長万部・礼文華（豊浦町）・虻田（現在は洞爺湖町）、日高東部（浦河・様似）、十勝、旭川などでエハ *cha* と呼ぶ。その他、アハ *aha*・ヌミノカン *numinokan* などの名称が知られている。【知里真志保1953】

¹⁶ 隣の長万部ではヤブマメ掘りの歌が記録されている。【知里真志保1955:81-82】

椎久：イモのことだけ。何百年か前のことだかねえ、そういうこと、歌って踊って、そして、遊んでいたことがありました。

更科：ああ。そうですか。

椎久：ええ。

更科：こういうもの取るのは大体女の人ですからね。

椎久：女の人です。

更科：そうですね。はあはあ。

椎久：私も子供の時は語って、手叩いて、歌った覚えがあるから、今、ちょっと真似てみました。あはは。

更科：ありがとうございました。

椎久：すいません。

4-2-2. 子守唄1

子守唄は各地に伝承されているが、地域によって名称が違う。久保寺逸彦・知里真志保両氏らの著作などを見てもこの地方で子守唄を何と呼ぶのかはっきりした記録はない。

ただ、この歌の中にコイフンケ *koihunke* という動詞が出てくる。また、このあとの「子守唄2」の説明の中で子守唄のことをイフンケ *ihunke*¹⁷と呼んでいる。

椎久氏はこの子守唄を歌うと幼少時のことを思い出し、涙ぐんで2度も歌が中断している。そのことが更科氏にとって非常に印象的だったようで、著書においてもそのことを何度も書いている。

なお、エフア *chu a* などのかけ声には意味はないので日本語訳は付していない。

エフ ア エフ

chu a chu

エフ アシ

chu asi

エフ ア

chu a

モコロ モコロ

眠れ眠れ

mokor mokor

エフ ア

chu a

モコラン キ コ

眠ったならば

mokor=an ki ko

¹⁷ 八雲と比較的言葉が近いと思われる幌別（登別市）ではイフムケ *ihumke* と呼ぶが、筆者がテープを何度も聴いて確認した範囲では ム m ではなく、ン n と発音していると判断した。

エフ ア

ehu a

ホヨ ヤン キ ナ¹⁸

???がやってくるよ

hoyo yan ki na

(ここで歌が中断。)

涙ぐんで出てこない。あはは…。

エフ アシ

ehu asi

エフ ア

ehu a

モコロ シンダ¹⁹ ラン ラン

眠りのゆりかごが降りてくる

mokor sinta ran ran

モコロ シンタ

眠りのゆりかご

mokor sinta

シンタ パケ

ゆりかごの頭

sinta pake

コイフンケ クル

で子守唄を歌う神よ

koihunke kur

エフ ア

ehu as

エフ アシ

ehu asi

エフ

ehu

モコラン キ コ

眠ったならば

mokor=an ki ko

エフ ア

¹⁸ 「ホヨ *hoyo* が陸に上がってきた」という意味に解釈したが、ホヨ *hoyo* の意味は不詳である。幌別方言などでホイヨ *hoiyo* [悪ふざけをする] というような自動詞が存在するが、関係あるかどうか不明である。他地方では眠らなければ、「化け物鳥がやってくる」とか「塩／雑草の実をお前に食わせる」などの形で、眠らない子供をおどす表現になっていることが多いが、ここでは、「眠ったならば」の後に続いているので、脅しの意味ではないと推測される。読者からのご教示をお願いしたい。

¹⁹ *t* が有声化してダ[da]と発音されている。このあともシンタ *sinta* のタ *ta* が有声化している例がいくつもある。権久氏の場合、*n* のあとの *t* が有声化することが多いようである。

ehu a

ホヨ ヤン キ ナ

???がやってくるよ

hoyo yan ki na

エフ ア

ehu a

モコロ モコロ

眠れ眠れ

mokor mokor

なんだべなあ。涙ぐんで出てこないわ。困ったなあ。元にしてくれ²⁰。

モコロ モコロ

mokor mokor

エフ ア

ehu a

モコロ シンタ ラン ラン

眠りのゆりかごが降りてくる

mokor sinta ran ran

モコロ シンタ

眠りのゆりかご

mokor sinta

シンタ パケ

ゆりかごの頭

sinta pake

コイフンケ クル

で子守唄を歌う神よ

koihunke kur

エフ ア

ehu a

エフ アシ

ehu asi

エフ ア

ehu a

モコロ シンタ

眠りのゆりかご

mokor sinta

シンタ パケ

ゆりかごの頭

sinta pake

コイフンケ クル

で子守唄を歌う神よ

koihunke kur

²⁰ 歌い直すのでテープを元に戻してほしいという意味か。

エフ ア

ehu a

ペ カ ワ ホプニ ペ²¹

水面から浮き上がるものが

pe ka wa hopuni p he

モコン²² ネ

眠りなのだろうか

mokor ne

モコロ シンタ ラン ラン

眠りのゆりかごが降りてくる

mokor sinta ran ran

エフ ア

ehu a

エフ アシ

ehu asi

エフ ア

ehu a

トイ カ ワ ホプニ ペ

地面から浮き上がるものが

toy ka wa hopuni p he

モコン ネ

眠りなのだろうか

mokor ne

ペ カ ワ ホプニ ペ

水面から浮き上がるものが

pe ka wa hopuni p he

モコン ネ

眠りなのだろうか

mokor ne

モコロ シンタ ラン ラン

眠りのゆりかごが降りてくる

mokor sinta ran ran

エフ ア

ehu a

エフ アシ

ehu asi

エフ ア

ehu a

モコロ モコロ

眠れ眠れ

mokor mokor

エフ ア

²¹ ッ へ p he が連音してペ[pe]と発音されている。

²² 他地方同様、r n→n n という音韻変化が起こっている。

ehu a

モコロ シンタ

眠りのゆりかご

mokor sinta

シンタ パケ

ゆりかごの頭

sinta pake

コイフンケ クル

で子守唄を歌う神よ

koihunke kur

エフ ア

ehu a

エフ アシ

ehu asi

(エ…) エフ ア

(e...)ehu a

椎久：はは。こんなようなところで。

更科：はいはい。どうもどうも。

椎久：なんとも昔の子供の時のことを…

女性²³：??? (不明)。これ²⁴は、自分がそうしてだまされた²⁵もんだっきや、涙出るんだな。

更科：そうなのね。

椎久：なんともね、なんぼ??? (不明) してもね…

女性：腰が立たねえで、爺さま婆さまに抱っこされて、しんばらく²⁶だまされたから…思い出して。

椎久：思い出してね。ありがたみが胸に迫って…

更科：そうですねえ。

椎久：出てこない。

更科：いやいや。ありがとうございます。

椎久：まだしばらくありますか。

4-2-3. 日本語の民謡

椎久氏は日本語による民謡を1曲歌っている。この調査がアイヌ文化・アイヌ語についてのものであるという趣旨を理解しているであろう椎久氏が、この歌について「お門違い」と発言していることを考えても、アイヌの伝統的な歌謡ではなく、和人起源の民謡ではないかと思われる。

²³ 地元の方と思われる中年以上の女性だが、誰なのかは不明。

²⁴ 椎久氏を指す。この女性は、椎久氏と幼い頃から身近に接していた人であることが分かる。椎久氏の家族もしくは親類の方であろうか。

²⁵ 北海道・東北・関東北部などの方言で子供を「あやす」という意味で「だます」という言葉を使うことがある。

²⁶ 「しばらく」の方言形。

おそらく東北起源の民謡ではないかと思われるが、日本民謡は筆者の専門外であり、詳しいことは分からない。筆者の知人で、東北もしくは北海道出身で、日本民謡について知識のあると思われる方何人かにも聞いてもらったが、詳しいことは分からなかった。ただ、青森県に伝わる津軽じょんがら節や黒石じょんがら節に、似たようなくだりがあり、関係がありそうである。読者からのご教示を期待したい。

筆者の聞き取れる範囲での歌詞を以下に示すにとどめる。「/」は節の切れ目を示す。曲調が変わったりして、一まとまりになっている部分は改行で区切った。

なお、様似町在住の岡本きつ氏、熊谷カネ氏からは歌詞の聞き取りで有益なご教示を頂いた。

はあああ／一つ歌いましょう／はばかりながら

椎久：これは少しお門違いかしらんな。

更科：ええ。ええ。ええ。ええ。

女性：それでやれ（不明瞭）。

はあああ／七つ小女郎子²⁷／青菜をゆすぐ／そこで殿様／あどっこいどっこいどっこいしょと
はあああ／国の殿様川に寝ていたきや／七つ小女郎子／青菜をゆすぐ／青葉ゆすげばな大川濁る^{たいかわ}
／そこで殿様申するのには／はあ／この子よい子だもちっと大きけりや我が妻にする／そこでその
子の申するのには／これさ、殿さん、何言わさんす／うちの親たちや百姓が商売／稲の出穂²⁸さえ
祭れば祭る／そこで殿様その理に負けて／山のうちにも大山小山／小山小さいとて／荷縄かけてどっ
こいすっこい／うんとこそと背負われはしない／山についたる大沢小沢／小沢ちちやいとて後
ろ跳ね²⁹はできぬ／沢についたる大石小石／小石ちちやいとて／大根蕪のよにかりもりと嘯まり
はしない／沢についたる大川小川^{こがわ}／小川ちさいとて飲み干されまい／あああ／船のうちにも大
船小船／小船ちちやいとて大海走る^{たいかい}／人のうちにも大人小人^{おおびと}／小人はちさくても太閤様になるさい
ああ すってんばってん くらしま³⁰どってん 足元つげねば ばってん このやろ は えいや
えいやと

オーライ。

(一同笑う)

²⁷ 「ななちこじょろこ」に聞こえる。「ななち」は「七つ」であろう。「こじょろこ」の意味が不明であったが、甲地利恵氏のご教示をもとに「小女郎子」と解釈した。「女郎（「じょろ」とも読む）」とは現在の一般的な用法とは異なり、若い娘を指す言葉として古文や方言などで使われることがある。

²⁸ 「てほ」にも聞こえるが、稲穂を指す言葉で東北の民謡に出てくる「出穂」のことが。甲地利恵氏からも同様の指摘を頂いた。

²⁹ 不明。津軽じょんがら節や黒石じょんがら節では「あとばね（後跳ね）」という表現になっているのでこれと同じ意味で使われていると思われる。水がはねることを指すか。

³⁰ 北海道・東北の方言で「暗いところ」を指す言葉。

4-2-4. 時化^{しけ}にあった時の神への祈り

海の近くにあるユーラップ（遊楽部）の集落では、アイヌの人々が代々漁業を生業として営んでいた。自ら漁師でもあった椎久氏の伝えていた、海で時化にあった時の祈り言葉である。

カント オッタ	天において
kanto or ta	
シヌプル カムイ	真に力を持つ神
sinupur kamuy	
カムイ テッサモロ	神のお手前
kamuy teksamoro	
タナント オッタ	今日において
tananto or ta	
ピウケ (シリ…) シリウエン	荒々しい不天候
piwke (sir...)sirwen	
アン ネ ³¹ クス	であるので
an ne kusu	
エネ ポカイキ	どのように
ene pokayki	
キ クニ カ	すべきかも
ki kuni ka	
クエランペテッ	私は分からない
ku=erampetek	
ネ ルウエ タパン ナ	わけであります
ne ruwe tapan na	
イランマカカ	ちゃんと
iramkakaka	
タパン ニマンポ	この舟
tapan nimampo	
ニマム サンテッ ³² カ	この舟の行く末を
nimam santek ka	
チコニタタ	お見守りくださり

³¹ ここにおけるネ ne が、デアル動詞（2項動詞）のネ ne であると考え、動詞のアンに後置するのは諸方言の例から言うと破格である可能性がある。そのあとに接続助詞のクス kusu が後続している、終助詞のネ ne でもない。この祈り言葉では、動詞のあとにネ ne が後続している表現が多く、ほかの方言ではあまり見られない用例である。この方言では、ネ ne にキ ki のような代動詞的用法があるのかもしれない。

³² サンテッ santek は通常「子孫」「末裔」と訳される言葉であるが、この場合、そう訳すと意味がとりづらい。文脈から考えて舟の「行く末」を指していると解釈した。カ ka [上] と結合した合成語かもしれない。

ci-konitata

イランマカカ きちんと

irammakaka

マサラソ カシ 草わらの上に

masarso kasi

ピッカ³³ チペヤンケ³⁴ しっかり舟を上げて

pirka cip eyanke

キ ワ エンコレ 下さいませ

ki wa en=kore

更科：これはあの、あれですね…

権久：ええ。これを3回唱える。

更科：ああ。そうですか。

権久：ええ。

更科：はあ…。

ああ、そうですか。

権久：ええ。

更科：それからガス³⁵かかった時のね…あのう…

権久：ガスかかった時の。

更科：あのう…カピウ〔カモメ〕に頼むやつありましたね。³⁶

カント オッタ 天の国で

kanto or ta

イマキシシ³⁷ カムイ 見守っている神様

imakisis kamuy

ネット アン クス 海が凧^ないので

neto an kusu

クレパ アワ 私は沖に出たところ

³³ このピッカ *pirka* をチップ *cip* を形容する動詞として、「美しい(よい)舟」解釈することもできるが、ここは副詞的な用法と解釈した。

³⁴ ここは「チペヤンケ」にも聞こえるが、チピ ヤンケ *cipi yanke* と理解するとチップ *cip* が所属形になっている理由の説明がつかない。名詞句マサラソ カシ *masarso kasi* をエヤンケ *eyanke* のエ *e-* が受けていると考えると整合性がつくので、チップ エヤンケ *cip eyanke* と解釈することにした。

³⁵ 北海道弁で「霧」を指す言葉。

³⁶ この発言から、更科氏はこの祈り言葉をはじめて聞いたわけではないことが分かる。前回もしくは前日の調査で同じものを聞いたのであろうと推測できる。

³⁷ この祈り言葉に頻出するこの言葉は、筆者の知る限り、ほかの資料には見当たらない。おそらく自動詞ではないかと思われるが、文脈から「見守る」「守護する」というような意味ではないかと推測している。読者の方からのご教示をお願いしたい。

ku=repa awa	
エクシコンナ	突然
ekuskonna	
シリウエネアン	時化にあい
sirwenean	
(シリ…) シシクル ³⁸	霧が
(sir…)siskur	
イロンネ カス ワ	あまりにも深くて
ironne kasu wa	
チシケトコ カ	視界が
ci=siketoko ka	
クンナタラ	暗くなっている
kunnatara	
ネ ルウエ ネ クス	わけでありますので
ne ruwe ne kusu	
エネ チポアニ カ	どのように舟をこげばいいのか
ene cipo=an i ka	
エランペテッ	分からない
erampetek	
アニ ³⁹ タパン ナ	次第であります
an i tapan na	
チッ ルウエトッ	舟の行き先に
cip ruwetok	
ピリカ イマキシシ	十分なお見守りを
pirka imakisis	
キ ワ エンコレ	して下さい
ki wa en=kore	
カムイ エカシ	神なる翁
kamuy ekasi	
カピウ エカシ	カモメの翁

³⁸ 他地方では聞かれる言葉ではないが、『アイヌ語方言辞典』にこの語が八雲方言の「霧」に相当する言葉として載っている。【服部ほか1964】ジョン・バチラー『アイヌ・英・和辞典』に shishur, shishkun, shishkuru の語（いずれも意味は「小浪（波）」）が出ているが、関係があるかもしれない。【バチラー1938】

³⁹ この方言でもエランペテッ erampetek は、他動詞であると思われるが、なぜか人称接辞アン=an が後置している。その前のエネチポアニカ ene cipo=an hi ka という句を抱合して、エネチポアニカエランペテッ ene-cipo-an-i-ka-erampetek という一つの自動詞を形成しているとは考えにくい。目的語を含む動詞句全体を、アン=an が受けて人称を表示する人称接辞の独立的用法かもしれない。

kapiw ekasi

シヌプル カムイ

真に力のある神

sinupur kamuy

イオイラ サッコ

忘れることなく

ioyra sakno

ピリカ イマキシシ

十分にお見守りを

pirka imakisis

キ ワ エンコレ ヤン

して下さい

ki wa en=kore yan

4-2-5. 子守唄2

「子守唄1」と同じものが再度吹き込まれている。

モコロ シンタ ラン ラン

眠りのゆりかごが降りてくる

mokor sinta ran ran

モコロ シンタ ラン ラン

眠りのゆりかごが降りてくる

mokor sinta ran ran

ペ カ ワ ホプニ ペ

水面から浮き上がってくるのが

pe ka wa hopuni p he

モコン ネ

眠りなのか

mokor ne

モコロ シンダ ラン ラン

眠りのゆりかごが降りてくる

mokor sinta ran ran

エフ ア

ehu a

エフ アシ

ehu asi

エフ ア

ehu a

モコロ シンダ

眠りのゆりかご

mokor sinta

シンダ パケ

ゆりかごの頭

sinta pake

コイフンケ クル

で子守唄を歌う神よ

koihunke kur

エフ ア

ehu a

エフ アシ

ehu asi

エフ

ehu

ホロロロロロ

horororororo

エフ

ehu

エフ アシ

ehu asi

エフ

ehu

モコロ シンタ

眠りのゆりかご

mokor sinta

エフ

ehu

シンタ パケ

ゆりかごの頭

sinta pake

コイフンケ クル

で子守唄を歌う神よ

koihunke kur

エフ ア

ehu as

エフ アシ

ehu asi

エフ

ehu

更科：今のね、歌の意味をちょっとゆってくれませんか。

椎久：ああ。歌の意味…イフンケ ihunke [子守唄] の意味は……なんだべ、ちょっと…出（言葉が詰まる）

更科：子守唄。

椎久：はい。子守歌…こんがらませて（？）言うので…口に（？）合わなくなる⁴⁰。

（一同笑う）

⁴⁰ 筆者がこの地方の方言について聞きなれてないため聞き取りが難しい。

権久：こんがらがってしまう。

男性⁴¹：??? (音声不明瞭) あるから。

更科：眠りは水の上から。

権久：また、あのイフンケ ihunke [子守唄] やるんですか？

更科：その意味をシサムイタク [日本語] でちょっと…

男性：なんだかもやもやもやと。

権久：水面から煙のようにもやもやと浮き出るものでしょうか。地面からもやもやと浮き出るものでしょうか。このイフンケ ihunke [子守唄]、子守の神様よ、このゆりかごの上に、静かに降りて子守をしてくれ。

更科：はあはあはあ。

権久：こういうのです。

更科：ああ。そうですか。その…あれですね。守り神ってのが、今言った⁴²、シギ鳥っていう、くちばしの長い…

権久：まあ、それに限らずですね…

更科：ああ。それに限らないんですか。

権久：ええ。それに限らないで、シンダ バケ コイフンケ クル sinta pake koihunke kur っていうのは、まず守り神。

更科：シンタ パケ ^(ママ)イフンケ クル。

権久：ええ。

更科：ははあ。なるほどね。

権久：ええ。シンダ sinta に対するイフンケ ihunke してくれる神。

更科：ああ。なるほどね。はあ。そうですか。

権久：静かに、このシンタ sinta に降り下って子守りしてくれ。

更科：ああ。そうですか。そうすると、今の、シギ鳥だけじゃなくて…

権久：シギ鳥でなくて。ええ。

更科：シギ鳥の時でもいいんですか？

権久：うん。何あってもいい。

更科：何あってもいいんですか。

権久：なくてもいい。そういうようにお祈りする。

更科：祈りと…

権久：祈りと子守と、共通して、まあ、子守唄になっていたように思います。

更科：ああ。そうですか。どうもどうも。ありがとうございました。

⁴¹ 「4-1. 解説」で述べたように、調査時に地元の農協もしくは役場の職員が同行しているので、そのどちらかの声ではないかと思われる。

⁴² この録音テープでは該当箇所がないが、この歌を歌う前に鳥のシギに関係する話があったようである。

4-2-6. 海で魚を釣る時に述べる言葉

魚釣りに行った時に、大物がかかるように、魚に対して唱える呪文である。

海での漁猟の際に唱える言葉は、幌別（登別市）や東静内（現新ひだか町）でカジキマグロ漁をする時の唱えごとが記録されているほか【佐藤1938:60、日本放送協会1965:370-373】、採集地は明記されていないがマンボウ漁の時の言葉が記録されているなど【更科1977b:504-505】、何箇所かで記録されている。だが、これらは巨大な魚に対するもので、あまり大きくない魚を釣る時の言葉は、筆者の知る限りではこれ以外にないので貴重な記録である。

更科：椎久さん、今のね、あのう…あれは、カレイ釣りに行った時ですか？

椎久：ああ。そうです。

更科：あの時の、その…カレイの…怒らせる、あの言葉を一つ…。これはカジカなんかでもですか？

椎久：ええ。カジカでもアブラコでもね。

更科：ああ。何でも。

椎久：カレイでも。釣りに行った時です。

更科：ああ。そうですか。

椎久：魚に対してうんと怒らせること。怒ったら食え。

ホックレ ホックレ ホックレ ホックレ ⁴³	さあさあさあさあ
hokkure hokkure hokkure hokkure	
ホシキ ヤン ペ	最初に揚がったものは
hoski yan pe	
ニマム アサム	舟の底
nimam asam	
クコオテッテレケ	に私は踏みつけて
ku=kootetterke	
アコペネレ	ぐちゃぐちゃになる
a=kopenere	
イケムヌ ⁴⁴ クル ⁴⁵	くやしく思う者よ
ikemnu kur	
イケムヌ クル	くやしく思う者よ

⁴³ 他地方ではホックレ **hokure** と発音されるが、**k** が二重子音となるのがこの地方の特徴のようである。『アイヌ語方言辞典』における記述とも一致している。【服部ほか1964】

⁴⁴ 沙流・千歳方言では「気の毒に思う」「哀れに思う」というような訳になることが多いが、登別の金成マツ氏のユカラ（英雄叙事詩）での用例などを見ると、敵に対する憎しみの感情を指す言葉で思われるので、「くやしく思う」と訳した。

⁴⁵ 実際はクル **kur** とその次のイ **i** が連音してクリ **kuri** と発音されているように聞こえる。ここでは1行ずつ区切って表記する。

ikemnu kur	
イケムヌ クル	くやしく思う者よ
ikemnu kur	
ホックレ ホックレ ホックレ	さあさあさあ
hokkure hokkure hokkure	
アネ テケ ⁴⁶	細い腕
ane teke	
アネ アピ ⁴⁷	細い釣り針
ane api	
チ ⁴⁷ コトウイエ	もろとも切ることを
ci-kotuye	
エキ ナンコン ナ	お前はするんだよ
e=ki nankor na	
ホックレ ホックレ ホックレ	さあさあさあ
hokkure hokkure hokkure	
イチャッケレ タ	汚らしい
icakkere ta	
エ ルスイ ペ	食べたいもの
e rusuy pe	
トゥカリケ	その手前
tukarike	
オサラスイエ ⁴⁸	に尻尾を振るのか
osarsuy e	
フ アチカラ ⁴⁹	ああ汚らしい
hu acikara	
トゥ トウ トウ トウ トウ トウ	(つばをかける擬態語?)
tu tu tu tu tu tu ⁵⁰	
イチャッケレ タ ⁵¹	汚い奴
icakkere ta	

⁴⁶ 椎久氏の解説では「俺の腕」と訳しているのですが、アアネテケ a=ane-teke もしくはアネアテケ ane a=teke というような表現になるのではないかとと思われるが、人称接辞のア a=はないように聞こえる。次行も同様。

⁴⁷ 人称接辞でなく、コトウイエ kotuye […を…ともに切る] という複他動詞を名詞化する接頭辞ではないかと思われる。

⁴⁸ 相手に尻尾を見せて逃げることを表現していると思われる。

⁴⁹ フhu は不明。相手を威嚇する間投詞か。アチカラ acikara も、相手を汚いものとする間投詞か。

⁵⁰ このあとのも更科氏との問答の中で話題になっているが、つばを吐きかける行為を表現しているらしい。

⁵¹ こも解釈が難しいが、相手を罵る言葉ではないかと推測した。タ ta は強調の副助詞か。詳しい用法は分からない。

エ ルスイ ペ	食べたいもの
e rusuy pe	
トゥカリケ	その手前
tukarike	
(オ…) オサラスイエ	に尻尾を振るのか
(o…) osarsuye	
ホックレ ホックレ ホックレ	さあさあさあ
hokkure hokkure hokkure	
アネ テケ	細い腕
ane teke	
アネ アピ	細い釣り針
ane api	
チコトウイパ	もろとも切ることを
ci-kotuypa	
エキ ナンコン ナ	お前はするであろう
e=ki nankor na	
ホックレ ホックレ ホックレ	さあさあさあ
hokkure hokkure hokkure	

椎久：終わり。

更科：ああ。そうですか。これ、あのう…あの、トウトウトウっていうのは、つばをかける時の…

椎久：そうだ。

更科：そうですか。あのう、大体の意味を日本語でちょっと言ってみてください。

椎久：カレイ釣りに、海に、釣りに行った時に、先にとった魚は、舟の底に踏みつけて踏みつぶした。そら、それを見て腹立ったんだろう、と。代わりの強い奴、そら、この針を切れ。また俺の腕を折るだけの大物、引っかかって来い。このおいしい餌につけないのか。食いたい餌に口もつけないで背中向けて逃げるのか。卑怯者。いやあ、この卑怯者。そら、来い。ほら。俺の針を切れ。折れ。俺の腕も折れ。そのくらいにかかってこい。そら、来い。ほら。こういうような…。

4-2-7. 遭難した舟がキツネに救われた話

かつてオットセイ猟が盛んであった⁵²ユーラップアイヌに伝わる言い伝えである。この言い伝えは、『アイヌ伝説集』でも紹介されている。【更科1981:21-22】

⁵² 詳しくは犬飼哲夫・森樊須「北海道アイヌのアザラシ及びオットセイ狩り」を参照。

それでは、昔、オットセイとりの時代に、遭難した話をしたいと思います。昔、広く言えば湾⁵³内一帯のオットセイとりのくり舟が、大風に出会って、みな、困ってる時に、遊楽部の昔々のおじいさんが天に向かってお祈りをしたところが、遊楽部岳のてっぺんからと思う、天から降ったように白い大きな雲の塊が、そのオットセイとり船団のぐるりを一回りしたと思った瞬間、その一番風上にいてかいていた舟の、お祈りしていた舟の、遠く舳^{へさき}の近くに、水の上さ、舞い降りたかと思う…思ってたところが、大きなクマぐらいのキツネが、あと見、あと見して泳ぎだしたので、これはお祈りの助け神が見えたとおじいさんたちが一斉に大きなキツネに向かって、あとを追って舟を進めたおかげで、今の黒はげ⁵⁴というか、赤はげというか、落部^{おとしべ}と野田追^{のだおい}の間にある、はげの下に舟が無事に陸^{おか}に着いたということ、わたくし、子供の頃から聞かされて、何かの時に、今もって、忘れることの出来ない、トゥキ tuki [酒杯] あればお神酒^{みき}を上げてお祈りしています。

男性：キツネの色は、どんな色だったんですか？

椎久：色は真っ白い、大きなクマぐらいのキツネであったというお話です。

男性：その…キツネの名前って言いますか…あの…

椎久：レタラ ポロ (シ…) シトゥンペ⁵⁵ カムイ retar poro (si...)situnpe kamuy [白い大きなキツネ神]、レタラ シトゥンペ カムイ retar situnpe kamuy [白いキツネ神] とゆって、お神酒上げます。

更科：ああ。そうですか。ありがとうございます。

4-2-8. ヒバリの聞きなし

ヒバリの鳴き声を人間の言語で言い表したもの。長万部や幌別、平取など、各地に同類の歌が伝承されている。この八雲の歌と表現が部分的に似たものもある。早口言葉として伝承されている例もある。

意味については椎久氏が冗談交じりで述べているようで伝承者にとっても不明であったようである。なので日本語訳は付していない。この歌は『コタン生物記Ⅲ』でも紹介されている。【更科1977c:606】

ピシト リンゴ

⁵³ 噴火湾のこと。

⁵⁴ 「はげ」もしくは「はけ」とは、東北や関東の方言で「がけ」を指す言葉であり、八雲でも使われていたと思われる。「黒はげ」「赤はげ」は八雲町内の地名。『改定八雲町史下』では「黒禿」と表記し、「クリバケ(雲の多い所)」というアイヌ語が語源であるとみなしているが【八雲町史編纂委員会1984b:472】、にわかには賛同しがたい。同書によると、はげ地ではなく、「樹木のよく茂った林野」であるとのことだが、「赤はげ」については記載がない。「はげ」が日本語であるならば、それぞれ土の色をもとにした地名かと推測されるが、今回現地調査による確認はできていない。この地名については、八雲町郷土資料館にてご教示を頂き参考にさせて頂いた。

⁵⁵ キツネを指す言葉は、北海道で、チロンヌマ cironnup もしくはチロンノマ cironnop が一般的であるが、位の高い神として讃える美称としてシトゥンペ situnpe もしくはシトゥンピ situnpi という言い方がよく使われる。【知里真志保1963】

pisto rimpo

ピシト リンポ

pisto rimpo

シクン トウワテ トウワテ

sirkun tuwate tuwate

クルルン クルルン

kururun kururun

マクン マクン

makun makun

キナ トイ クルカ

kina toy kurka

コケンラッキ

kokenratki

チコパララ

cikoparara

アリノ タツネ

と

arino tapne

イレス フッチ⁵⁶

育ての祖母が

iresu hutci

イパカシヌ アワン

教えてくれたんだ

ipakasnu awan

(同じ文句を早く唱える)⁵⁷

アリ スン(?) ハワシ

と???言う

ari sun(?) hawas

更科：それ、日本語にしますとどういうことになるんですか？

椎久：ちょっとねえ1週間ぐらい…3年ぐらいかかんねえば⁵⁸、これ、解釈できないんじゃないかなあ。ははは。

更科：どうもありがとうございました。

⁵⁶ 北海道の多くの地方ではフチ huci と言うが、この地方では、フッチ hutci という発音になる。『アイヌ語方言辞典』も同様の記述である。その他、白老・虻田でも同様の発音が優勢である。『分類アイヌ語辞典人間編』によると千歳でも同じ言い方が存在することが報告されている。【知里真志保1954】

⁵⁷ ただし、クルルン クルルン kururun kururun/マクン マクン makun makun の順番を1回目とは逆に歌っている。

⁵⁸ 北海道方言で「かからないと」という意味。

4-2-9. カッコウの物語

折り返しを持つ形式の物語のようであり、神謡の一種と思われる。折り返しは、コンカワ カッコウ コン カワ カッコウ *konkawa kakkon kawa kakkon* というものである。

この地方で神謡を何と呼んでいたかについては管見の範囲では分からない。静内（現・新ひだか町）の織田ステノ氏の伝承していた神謡に、一部類似したものがある。【織田1981】

更科：それ、カッコウの歌ですね？

権久：忘れたことなら…思い出すか。

折り返し (V) : コンカワ カッコウ カワ カッコウ
konkawa kakkon kawa kakkon

V ⁵⁹ カッコウ ⁶⁰ サポ ⁶⁰ kakkon sapo	カッコウの姉は
V エハ タ クス cha ta kusu モシソ カ ウン mosirso ka un	ヤブマメ掘りに 大地の上に
ラッ ワ イサム rap wa isam	降りていってしまった
V ル オカケ タ ru okake ta	そのあとに
V ポン カッコウ ウタラ pon kakkok utar	小さなカッコウたちが
V アキムイカシ a=kimuykasi トッパ トッパ toppa toppa	私の頭の上 を突っつき突っつきした
V ヘンパノ タ キ ⁶¹	すぐさま

⁵⁹ ここだけ最初のコンクワ *konkuwa* をカンクワ *kankuwa* と発音しているように聞こえる。

⁶⁰ このカッコウ *kakkon* は、折り返しの一部かとも考えたが、サポ *sapo* を形容している名詞とみなした。ただし、このあとの権久氏の説明の中に出てくるように、ほかの多くの地方同様、この地方でもカッコウを指す普通名詞はカッコウ *kakkok* のようである。しかしここで、筆者の耳にはカッコウ *kakkok* には聞こえない。知里真志保によると、屈斜路ではカッコウをカッコウカムイ *kakkon-kamuy* と呼ぶ。【知里真志保1963】物語での特別な言い方か。

⁶¹ この解釈は難しい。ヘンパノ *hempano* は白老や旭川で「早く」という意味を持つ副詞である。【白老楽しく・やさしいアイヌ語教室2010、服部ほか1964】仮の訳として「すぐさま」とした。タキ *ta ki* はタケ *take* にも聞こえる。タ *ta* は強調する副助詞か。キ *ki* は代動詞か。しかし副詞句のあとにキ *ki* が後続する文型は破格かもしれないし、ほかの適切な解釈があるかもしれない。

hempano ta ki

カッコン サポ

カッコウの姉が

kakkon sapo

エッ ワ エッ タキ

やってきた

ek wa ek ta ki

V

ああ。息止まって分かんねえ。カッコク kakkok [カッコウ] のコタン kotan [村] で育って、カッコク kakkokの姉さまが、モシリ mosir [大地] さ、アイヌ aynu…アイヌ コタン aynu kotan [人間の世界] さ、エハ eha [ヤブマメ] とりに、天から降りたあとで、ポン カッコク pon kakkok [小さなカッコウ] たちに頭つつかれたり、ほっぺたつつかれたりして、大変苦しんで育った話、聞いたことあるから。ちょっと。

4-2-10. 東の果てから来た女の歌

歌詞の一部が非常に似ている歌が静内（現新ひだか町）で穀物の穂を摘む時の歌として記録されている。【日本放送協会1965:343、更科1973:218】複数の人の笑い声が聞こえる、にぎやかな雰囲気の中で歌われている。

メナシパ ワ

東の果てから

menaspa wa

トゥラ メノコ

連れてきた女

tura menoko

プルプルケ⁶²

ぼこぼこ

purpurke

プルプルケ

ぼこぼこ

purpurke

メナシパ ワ

東の端から

menaspa wa

トゥラ メノコ

連れてきた女

tura menoko

ナンカシヒ

外づらは

nankasihi

ピリカ コロカ

いいんだけど

pirka korka

⁶² この言葉は通常水などが「ぼこぼこ湧き出る」という意味であるが、ここでの意味は不明。

ウトウルケへ uturkehe	中身 ⁶³ は
テイネ テイネ teyne teyne	べとべとだ
メナシパ ワ menaspa wa	東の端から
トゥラ メノコ tura menoko	連れてきた女
ピリカ コロカ pirka korka	いいんだけど
プルプルケ purpurke	ぼこぼこ
プルプルケ purpurke	ぼこぼこ

椎久：なあんて。これ、子供の時から聞いていた。

更科：トゥラ メノコ tura menoko ってどういうことですか？

椎久：連れてきた女ということを使うんだ。

女性：メナシパ menaspa ったらね、東のはじからさ、連れてきたメノコ menoko [女] よ。

椎久：うん。そうだ。

更科：なるほど。

男性：その??? (不明) がプルプルケ…

更科：ああ。そうか。

女性：メナシパ ワ… menaspa wa… (と歌いですが、録音が切れている)

4-2-1 1. 舟歌

舟をこぐ時に歌う歌。ほとんどが掛け声のようである。こちらも笑い声が聞こえるにぎやかな雰囲気の中で歌われている。

ほとんどかけ声なので、ホレ エタイエ hore etaye (さあ引っ張れ) 以外のほとんどは意味のないはやし声のようである。

シサム トランネ カミヤシ ホイ sisam toranne kamiyasi hoy	和人の怠け者の化け物
へ ソラ イエ ⁶⁴	

⁶³ 通常「間 (あいだ)」と訳されるが、ナンカシヒ nankasihi との対比で「中身」と訳した。

⁶⁴ 以下、かけ声の分かち書きは、意味がよく分からないので多分に恣意的で暫定的なものである。

he sora ye

ヤサ ホ イエイ

yasa ho yey

ホレ エタイエ

さあ引っ張れ

hore etaye

ソレ エタ ホ イエイ サ

sore eta ho yey sa

ホレ エタイエ イヤ

さあ引っ張れ

hore etaye iya

ホレ エタイエ

さあ引っ張れ

hore etaye

ホレ エタ ホ イエイ ヤ

hore eta ho yey ya

ホレ エタイエ イヨ

さあ引っ張れ

hore etaye iyo

ホレ エタイエ

さあ引っ張れ

hore etaye

椎久：これははやしだ。

男性：それ、どういう時やるんです？

椎久：權かく時。

更科：ああ。權かく時。

椎久：權かく時。ちゃぶん、ちゃぶんと早^{はやが}權かく時。競争する時。せば、隣のね、舟が、シャモの若い人たち、惚れてもらったと思って、アイヌの若い、ご婦人がたさ、さあ手のけて、よいよいっているうち、???

(不明) 踏んで負けるのよ。

(一同大笑い)

ホレ エタ ホ イエ イヤ

hore eta ho ye iya

ホレ エタイエ イヤ

さあ引っ張れ

hore etaye iya

ホレ エタイエ

さあ引っ張れ

hore etaye

ホレ エタイエ

さあ引っ張れ

hore etaye

ホレ エタイェ イハ	さあ引っ張れ
hore etaye iha	
ホレ エタイェ	さあ引っ張れ
hore etaye	
ソラリ カ タ	踏ん張ってその上さらに (?)
sorari ka ta	
ソプニ ⁶⁵	踏ん張れ
sopuni katasorari	
ソプニ カ タ	踏ん張ってその上さらに (?)
sopuni ka ta	
ソラリ	踏ん張れ
sorari	
ホレ エタ ホ イェ イヤ	
hore eta ho ye iya	
ホレ エタイェ	さあ引っ張れ
hore etaye	
ってこうやる。權かくはやし。	

更科：それを「惚れた」と、あれしたわけ？

椎久：アイヌ語で、ホレ hore、ホレ エタイェ hore etaye [それ引っ張れ] と。ホレ エタイェ hore etaye そら、引っ張れ。

男性：それこげ、それこげ、だもんな。

椎久：それこげだ。それをね、相手の若い人たちはそう聞かないんだと。

男性：惚れたもんだと聞いた。

椎久：惚れたもんだと。

(一同大笑い)

ホレ エタイェ	さあ引っ張れ
hore etaye	
ホレ エタ ホ イェ イヤ	
hore eta ho ye iya	

⁶⁵ 不明。知里幸恵氏がノートに書き残した舟歌の歌詞にソラリカタソプニ sorari ka ta sopuni という同じ表現が出てくる【知里森舎「知里幸恵ノート」刊行部2003、知里真志保1937】。あとで地元出身らしい女性がソプニ sopuni について「踏ん張れ」という意味であると述べているので、それを生かした訳語にした。古くから各地で歌われてきた舟歌の固定的表現か。ソプニ sopuni はソ・プニ so-puni=床・起こす、ソラリ sorari はソ・ラリ so-rari=床・押さえる、か。

ホレ エタイエ イヤ さあ引っ張れ

hore etaye iya

ホレ エタイエ さあ引っ張れ

hore etaye

ホラ そら

hora

ソブニ ソブニ 踏ん張れ踏ん張れ

sopuni sopuni

ソブニ 踏ん張れ

sopuni

ソブニ ソブニ 踏ん張れ踏ん張れ

sopuni sopuni

っていうのは、ちょっと??? (不明瞭) 權かいて。

女性：踏ん張れっていうことだもんな。

ソラリ カ タ 踏ん張ってその上さらに (?)

sorari ka ta

ソブニ 踏ん張れ

sopuni

ソラリ カ タ 踏ん張ってその上さらに (?)

sorari ka ta

ソブニ 踏ん張れ

sopuni

椎久：^{とも} 艫の人さ、精つけるわけだ。

更科：ああ。負けるなって。

椎久：負けるな。

女性：權、曲げるなっていう…

椎久：艫。艫こげ。艫こげって言うんだ。

ソラリ カ タ 踏ん張ってその上さらに (?)

sorari ka ta

ソブニ 踏ん張れ

sopuni

ホレ エタ ホ イエ イヤ さあ引っ張れ

hore eta ho ye iya

ホレ エタイェ イヤ

さあ引っ張れ

hore etaye iya

ホレ エタイェ

さあ引っ張れ

hore etaye

4-3. 資料の評価

現在の八雲町内にはユーラップ（遊楽部）、オトシベ（落部）をはじめとするいくつかのアイヌの集落があったことが知られているが、ユーラップのアイヌ語については、今回紹介する椎久氏から採集したアイヌ語の語彙が服部四郎氏と知里真志保氏によって発表された「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」と、北村甫氏による語彙調査をまとめた服部氏ほか編『アイヌ語方言辞典』で発表された以外にまとまったものは少ない。その他、犬飼哲夫氏によるいくつかの著述や、北里^{たけし}関氏の著作がある程度であり⁶⁶、各地でアイヌ語や民族誌の調査を行った知里氏の著作でも八雲に関する記述は少ない⁶⁷。

また1961・1962年に日本放送協会（NHK）によって実施されたアイヌ伝統音楽調査事業の際は、北海道各地で網羅的な調査が行われたが、すでに椎久氏は死去されており、八雲では調査は行われておらず、八雲のアイヌ語や歌謡の音声資料は筆者の知る限り極めて数が少ない⁶⁸。そういった意味で今回紹介する資料の持っている価値は大きなものであると考える。

この資料は、今後、この地方において伝承されていたアイヌ語やアイヌ文化の復興・研究のために大いに活用されるべき貴重な資料であろうと考える。

5. むすびにかえて

これまでアイヌ研究の素材としては、胆振などの道央地域や日高・十勝などの道東地域のものがその中心的な役割を果たしてきた傾向があるが、最近の研究成果などから、道南地域におけるアイヌ資料についてもその存在と特色について明らかになりつつある【古原・小川2009、北海道立アイヌ民族文化研究センター2005など】。アイヌ文化に限らず、地域の文化の掘り起こしと評価・検証は、地域に根付いた博物館の重要な使命の一つである。また、地域で活動するアイヌの方々との相互理解と協働は、アイヌ資料を所蔵する博物館の今後の活動において極めて重要な要素となること

⁶⁶ 『日本語の根本的研究追補』に、北里関氏が1931年に樺太や北海道、東北各地でアイヌ語や日本語の諸方言を調査した際、依頼を受けた椎久氏が日本語の文章をアイヌ語訳したものが載っている。【北里1933:97-104】

⁶⁷ 管見の範囲では、『分類アイヌ語辞典人間編』に2つの語彙が収録されている以外、「呪師とカワウソ」で、ユーラップにおける鮭を迎える儀式を紹介する記述がある程度である。【知里真志保1954、1956a】その他の辞典などの著作では、八雲で採集されたと明示されている語彙はほとんど見当たらない。筆者の見落としがいくらかあるにしても、八雲についての記述は非常に少ないと思われる。

⁶⁸ 大谷大学図書館に、北里関氏が1931年の調査の際に録音したロウ管レコードが所蔵されているようであるが、筆者は未確認。また、八雲町内にも椎久氏らの音声の入ったテープがあることを確認している。ただし内容は今回紹介する資料とかなりの部分重複している。これらについては別の機会に改めて発表したい。

を認識しておかなければならない。

謝辞

本稿を構成するにあたり、以下の機関および個人においてはひとかたならぬ協力を頂いた。よって、ここに記して謝意を表したい。(敬称略)

なお本稿中の錯誤等に関しては、その責を当然筆者が負うものである。

社団法人北海道アイヌ協会八雲支部 岡本きつ 甲地利恵 椎久幸子 椎久健夫 熊谷カネ
八雲町郷土資料館

参考文献

- 犬飼哲夫 1942 「天災に対するアイヌの態度 (呪ひその他)」『北方文化研究報告』6:pp. 141-162 北海道大学;札幌市
- 犬飼哲夫・武笠耕三 1953 「アイヌの丸木舟の作製」『北方文化研究報告』8:pp. 1-8 北海道大学;札幌市
- 犬飼哲夫・森樊須 1956 「北海道アイヌのアザラシ及びオットセイ狩り」『北方文化研究報告』11:pp. 35-47 北海道大学;札幌市
- 大矢京右 2012 「市立函館博物館所蔵八雲関連アイヌ資料」『北海道民族学』8:pp. 77-80 北海道民族学会;札幌市
- 沖野慎二 2005 「博物館資料が語るアイヌ文化」『平成16年度普及啓発セミナー報告集』pp. 56-61 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構;札幌市
- 織田ステノ 1981 「カクコッサポのカムィューカラ」『神々の物語』財団法人アイヌ無形文化伝承保存会;札幌市
- 学習院大学史料館編 1997 『学習院大学史料館第17回特別展徳川義親侯とユーラップ・アイヌ』学習院大学史料館;東京都
- 加藤克 2002 「北大植物園所蔵丸木舟の樹種同定走査電子顕微鏡を用いて」『北大植物園研究紀要』2:pp25-36 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園;札幌市
- 加藤克 2008 「北海道大学植物園所蔵アイヌ民族資料について歴史的背景を中心に」『北大植物園研究紀要』8:pp. 35-91 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園;札幌市
- 萱野茂 1996 『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂;東京都
- 金成まつ筆録、金田一京助訳注1959-1966 『アイヌ叙事詩ユーカラ集 I～VIII』三省堂;東京都
- 北里闌 1933 『日本語の根本的研究追補』紫苑会;大阪府
- 久保田正秋 1969 「イコトル爺さん会葬記」『会誌ゆうらふ』3:pp1-2 八雲郷土研究会;八雲町
- 小坂博宣 2011 『知里真志保アイヌの言霊に導かれて』クルーズ;札幌市
- 古原敏弘・小川正人 2009 「【資料紹介】長万部教育委員会所蔵のアイヌ資料」『北海道立アイヌ民

- 族文化研究センター研究紀要』15:pp. 57-83 北海道立アイヌ民族文化研究センター;札幌市
財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2009『アイヌの美ーカムイと創造する世界ー』財団法人
アイヌ文化振興・研究推進機構;札幌市
- 齋藤玲子 2002「更科源蔵氏『コタン探訪帳』の概要について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』
11:pp. 79-10 北海道立北方民族博物館;網走市
- 先川信一郎 1987『ロウ管の歌』北海道新聞社;札幌市
- 佐藤三次郎 1938『北海道幌別村漁村生活誌』アチックミュージアム;神奈川県
- 佐藤亮一・小学館辞典編集部編 2003『日本方言辞典』小学館;東京都
- 更科源蔵 1970『アイヌと日本人伝承による交渉史』日本放送出版協会;東京都
- 更科源蔵 1971『アイヌ伝説集』北書房;札幌市 (ただし本稿では、同1981『アイヌ伝説集更科源蔵
アイヌ関係著作集1』みやま書房;札幌市を使用)
- 更科源蔵 1973『アイヌ文学の生活誌』日本放送出版協会;東京
- 更科源蔵・更科光 1977a『コタン生物記Ⅰ』法政大学出版;東京都
- 更科源蔵・更科光 1977b『コタン生物記Ⅱ』法政大学出版;東京都
- 更科源蔵・更科光 1977c『コタン生物記Ⅲ』法政大学出版;東京都
- 社団法人北海道ウタリ協会編 1994『アコロ イタッ』社団法人北海道ウタリ協会;札幌市
- ジョン・バチラー 1938『アイヌ・英・和辞典第四版』岩波書店;東京都
- 白老楽しく・やさしいアイヌ語教室編 2010『アイヌ語白老方言辞典』白老楽しく・やさしいアイ
ヌ語教室;白老
- 市立旭川郷土博物館編 1980『市立旭川郷土博物館蔵品目録Ⅷ』市立旭川郷土博物館;旭川市
- 市立函館博物館編 1979『市立函館博物館蔵品目録1 民族資料篇』市立函館博物館;函館市
- 田村すず子 1996『アイヌ語沙流方言辞典』草風館;東京都
- 知里森舎「知里幸恵ノート」刊行部編 2003『復刻版「知里幸恵ノート」』知里森舎;登別市
- 知里真志保 1937『アイヌ民俗研究資料第二』アチックミュージアム;神奈川県
- 知里真志保 1953『分類アイヌ語辞典植物編』日本常民文化研究所;神奈川県
- 知里真志保 1954『分類アイヌ語辞典人間編』日本常民文化研究所;神奈川県
- 知里真志保 1955『アイヌ文学』元々社;東京都
- 知里真志保 1956a「呪師とカワウソ」『北方文化研究報告』11:pp. 47-80 北海道大学;札幌市
- 知里真志保 1956b『地名アイヌ語小辞典』楡書房;札幌市
- 知里真志保 1963『分類アイヌ語辞典動物編』日本常民文化研究所;神奈川県
- 中川裕 1995『アイヌ語千歳方言辞典』草風館;東京都
- 名取武光 1985『アイヌの花矢と有翼酒箸』六興出版;東京都
- 日本放送協会編 1965『アイヌ伝統音楽』日本放送出版協会;東京都
- 服部四郎ほか編 1964『アイヌ語方言辞典』岩波書店;東京都
- 服部四郎・知里真志保 1960「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」日本民族学会編『民族学
研究』24(4): pp. 307-342 日本民族学会;東京都

- 馬場脩 1971 「私とアイヌ土俗品」『馬場コレクションカラフト・アイヌ展目録』 p1 市立函館博物館;函館市
- 馬場脩 1979 「アイヌの宝物」『国指定重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第5編アイヌの狩猟用具・その他』 pp34-35 市立函館博物館;函館市
- 平山輝男編 1992 『現代日本語方言大辞典1～8＋補巻』 明治書院;東京都
- 北海道開拓記念館編 1990 『更科源藏氏資料目録』 北海道開拓記念館;札幌市
- 北海道帝國大學編 1934 『昭和八年北海道帝國大學年鑑』 北海道帝國大學;札幌市
- 北海道立アイヌ民族文化研究センター編 2005 『ピリカ会関係資料の調査研究』 北海道立アイヌ民族文化研究センター;札幌市
- 八雲町 1957 『八雲町史』 八雲町役場;八雲町
- 八雲町史編纂委員会編 1984a 『改定八雲町史上』 八雲町役場;八雲町
- 八雲町史編纂委員会編 1984b 『改定八雲町史下』 八雲町役場;八雲町
- 由良勇編 1995 『北海道の丸木舟』 マルヨシ印刷(株);旭川市
- 1956年6月20日付北海道新聞 「八雲・ユーラップから古いアイヌの丸木舟博物館に貴重な文化財」
- 1960年8月17日付北海道新聞 「アイヌの裁判道具サイモン博物館へ」
- 1962年7月9日付北海道新聞 「ひと目でわかるアイヌ資料目録九月末には完成函館が中心五博物館と横の連絡」

北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第19号 (2013年3月)

市立函館博物館所蔵「椎久コレクション」

椎久コレクション原簿資料一覧			函館博物館蔵品目録			寸法 (cm)
原簿記載順	資料名	数量	収蔵番号	資料名	数量	
椎久 1	角盥	2	民族 0914	角盥(テクウシバッチ)	1	φ39.0 H23.5 勺台高6.0
			民族 0915	角盥(テクウシバッチ)	1	φ39.0 H22.0 勺台高4.4
椎久 2	耳盥	1	民族 0916	耳盥	1	φ26.0 H15.6 高台φ15.8 H4.1
椎久 3	脚付丸行器	2	民族 0921	行器(ケマウシベ)	1	身φ33.0 H26.0 脚H32.4・H35.0 蓋φ38.5 H10.5
			民族 0922	行器(ケマウシベ)	1	身φ35.9 H29.2 脚H36.5・H40.0 蓋φ40.9 H10.5
椎久 4	合子形食籠	1	民族 0897	合子形食籠	1	L35.5 W17.5 勺台高3.3
椎久 5	椽(はん)	1	民族 0928	椽(はん)	1	L20.5 W20.0 H3.7
椎久 6	注口(湯桶)	1	民族 0888	注口(エトウヌブ)	1	L28.9 W17.2 H17.9
椎久 7	注口(長柄銚子)	1	民族 0883	長柄両口銚子	1	φ16.5 H10.0 柄L27.0
椎久 8	椀	4	民族 0858	椀(イタンキ)	1	φ12.0 H6.7 勺台高1.1
			民族 0859	椀(イタンキ)	1	φ12.5 H7.0 勺台高1.2
			民族 0860	椀(イタンキ)	1	φ12.0 H7.0 勺台高1.2
			民族 0861	椀(イタンキ)	1	φ12.8 H7.0 勺台高1.5
椎久 9	椀(中椀)	2	民族 0862	椀(イタンキ)	1	φ14.0 H10.0 勺台高2.5
			民族 0863	椀(イタンキ)	1	φ15.0 H9.0 勺台高2.0
椎久 10	天目台(椀付)	4	民族 0831	天目台・椀	2	椀: φ12.6~13.0 H 6.3~6.5 高台φ6.3~6.4 H0.8 天目台: φ 16.0~16.5 H 8.6 高台φ 9.2
			民族 0832	天目台・椀	2	椀: φ12.2 H 7.2 高台φ5.6 H1.3 天目台: φ 16.0 H10.9 高台φ 9.1
			民族 0833	天目台・椀	2	椀: φ12.6 H 7.0 高台φ6.2 H1.3 天目台: φ 15.5 H10.6 高台φ 8.9
			民族 0834	天目台・椀	2	椀: φ12.5~12.6 H6.6~6.7 高台φ6.1~6.2 H1.1 天目台: φ 15.3 H10.1 高台φ 9.0
椎久 11	形罰棒	1	民族 1021	形罰棒	1	L65.0
椎久 12	イナウ一式	3	民族 0494	木幣(イナウ)	1	L57.0
			民族 0495	木幣(イナウ)	1	L53.0
			民族 0496	木幣(イナウ)	1	L53.0
椎久 13	サイモン用具	1	民族 0729	サイモン用具	1	φ5.5 穴φ2.0
椎久 14	ピバ(紐付)	1	民族 0473	穂摘用具	1	L9.8 W4.5
椎久 15	銚頭	1	民族 0454	銚頭	1	L8.2
椎久 16	刀綬	2	民族			
			民族			
椎久 17	蝦夷好腰刀(刀身付)	1	民族 0808	蝦夷好腰刀	1	L47.0
椎久 18	蝦夷好腰刀(刀身ナシ)	1	民族 0809	蝦夷好腰刀	1	鞘L54.0 柄L23.0
椎久 19	小柄(刀身付)	1	民族 0823	小柄	1	L19.5
椎久 20	蝦夷太刀(鐔付)	1	民族 0788	蝦夷太刀	1	L82.0
椎久 21	蝦夷太刀(鐔ナシ)	1	民族 0789	蝦夷太刀	1	L77.0
椎久 22	蝦夷太刀(柄ナシ)	1	民族 0790	蝦夷太刀	1	L57.8
椎久 23	刀身(三穴透アリ)	1	民族 0821	刀身	1	L60.5
椎久 24	刀身	1	民族 0822	刀身	1	L60.0
椎久 25	狼写真(額入)	1	民族 0001	狼の写真	1	L32.5 W26.0
椎久 26	煙草入(キセル付)	3	民族 0964	喫煙具	3	煙草入L6.1 W11.0 H8.0 煙管L43.0 煙管ホルダーL38.5 W3.7
椎久 27	酒籠	1	民族 0698	団子籠	1	L61.5
椎久 28	数とり	1	民族 0730	数取	1	L34.0
椎久 29	花矢	1	民族 0699	花矢	1	鏝L3.4 φ0.2 鏝L14.5 φ1.6
椎久 30	耳環(青玉付)	1	民族 0099	耳環(ニンカリ)	1	φ6.5
椎久 31	耳環(玉ナシ)	1	民族 0100	耳環(ニンカリ)	1	φ5.0
椎久 32	酒箸	4	民族 0694	ひげべら(イクバシュイ)	1	L33.5 W3.4 H0.9
			民族 0695	ひげべら(イクバシュイ)	1	L34.3 W3.3 H2.3
			民族 0696	ひげべら(イクバシュイ)	1	L33.5 W3.0 H0.6
			民族 0697	ひげべら(イクバシュイ)	1	L33.5 W2.8 H0.9
椎久 -	丸木舟	1	民族 0757	丸木舟	1	L656.0 W58.0 H29.0
			民族 0026	色裂置文衣(ルウンベ)	1	L123.5
			民族 0027	色裂置文衣(ルウンベ)	1	L125.0
			民族 0028	色裂置文衣(ルウンベ)	1	L118.8
			民族 0086	胸飾(タマサイ)	1	L49.0
			民族 0101	耳環(ニンカリ)	1	φ6.4
			H23-159	椎久年蔵使用の村田銃	1	L138.5 W21.5
			H23-160	椎久年蔵肉声記録	1	φ12.0(CD)

摘要	備考	寄贈/購入		
		受入年月日	受入先	形態
黒漆塗角だら。唐草桐かたばみ文様。	ラベル「シイクNo. 1」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
黒漆塗角だら。角欠け。	ラベル「シイクNo. 2」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
黒漆塗耳だら。丸に三葉葵(2ヶ所)[金蒔絵]。布着せ刻印なし。	ラベル「シイクNo. 3」 「盥No6」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
黒漆塗丸形行器(脚付)。身: 無文蓋: 菊花流水[金蒔絵]。蓋と脚に飾り金具付刻印なし。	ラベル「シイクNo. 4」 「シントコNo5」 「921」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
黒漆塗丸形行器(脚付)。身・蓋: 隅切角に三[金蒔絵]。蓋と脚に飾り金具付刻印なし。	ラベル「シイクNo. 5」 「シントコNo6」 「922」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
黒漆塗食籠。草花[金蒔絵] 三ツ巴一部破損。	ラベル「シイクNo. 6」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
黒漆塗注口。桐・唐草[金蒔絵]	ラベル「シイクNo. 7」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
黒漆塗注口(蓋付)。唐草[金蒔絵] 紙巻か刻印なし	ラベル「シイクNo. 8」 「注口No1」 「888」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
赤漆塗鋏子(根来塗)。柄末端破損。	ラベル「シイクNo. 9」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
漆塗椀(外梨地内朱)。七宝花角(2ヶ所)に唐草[金蒔絵]。	ラベル「シイクNo. 10」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
漆塗椀。草花[金蒔絵] 三ツ巴。	ラベル「シイクNo. 11」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
漆塗椀(外黒内赤)。菊花[金蒔絵] 流水[赤漆] 見込: クマ[黒漆]。	ラベル「シイクNo. 12」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
漆塗椀。菊花流水。	ラベル「シイクNo. 13」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
黒漆塗大形椀。木葉[金蒔絵]。	ラベル「シイクNo. 14」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
赤漆塗大形椀(挽物)。	ラベル「シイクNo. 15」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
椀: 漆(外赤内金) 左三ツ巴に唐草[金蒔絵] 見込: クマ[黒か] 刻印1(高台内) 天目台: 六角漆[黒] 3種の文様[赤黄緑]	椀: ラベル「シイクNo. 16 (1)」 「831」 天目台: ラベル「シイクNo. 16 (2)」 「天目台No7」 「831」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
椀: 漆(外黒内赤) 唐花に蛸唐草[赤黄緑] 見込: 三ツ巴[黒漆]刻印なし 天目台: 丸漆[黒] 葵に唐草[金蒔絵]	椀: ラベル「シイクNo. 17」 天目台: ラベル「シイクNo. 17」 「天目台No8」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
椀: 漆(外黒内赤) 貝尽し[金蒔絵] 見込: クマ[黒漆絵] 刻印1 割れ塗膜剥離 天目台: 丸漆[黒] 蝶に貝[漆絵か] 刻印2	椀: ラベル「シイクNo. 18 (2)」 天目台: 「シイクNo. 18」 「834」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
椀: 漆(赤) 七宝に花角(2ヶ)に唐草[金銀蒔絵] 刻印2 (高台内) 天目台: 漆[梨子] 松梅[金蒔絵] 刻印2	椀: ラベル「シイクNo. 19 (2)」 「834」 天目台: ラベル「シイクNo. 19」 「#19②」 「834」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
木製。刻み9箇所(紐付き)。	ラベル「シイクNo. 40」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
木製。削り掛け残存。	ラベル「シイクNo. 41①」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
木製。削り掛け残存。	ラベル「シイクNo. 41②」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
木製。削り掛け残存。	ラベル「シイクNo. 41③」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
環状骨製品(茶木綿布紐付)。盟神探湯に用いる。	ラベル「シイクNo. 42」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
貝殻製(有孔・茶木綿布紐付)。	ラベル「シイクNo. 43」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
基部骨製・鋼製鎌付。樹皮製縄付。	ラベル「シイクNo. 44」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
		1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
		1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
ブリキ製裝飾付刀鞘。	ラベル「シイクNo. 24」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
ブリキ製裝飾付刀鞘。	ラベル「シイクNo. 25」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
鉄製。柄に桐文5個付。	ラベル「シイクNo. 26」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
縄文様鞘紋付木製刀鞘。真鍮透鐫付。	ラベル「シイクNo. 27」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
金属製金具付木製刀鞘。鐸・刀身無し。	ラベル「シイクNo. 28」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
赤・黒彩色木製刀鞘。柄無し。	ラベル「シイクNo. 29」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
鉄製刀身(文様彫刻)。三穴透文様。	ラベル「シイクNo. 30」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
鉄製刀身(文様彫刻)。	ラベル「シイクNo. 31」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
削り掛け付狼頭骨の写真(額入)。	ラベル「シイクNo. 32」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
木製煙草入れ(螺鈿?青玉付)・煙管(吸口・雁首は銀製)・木製煙管ホルダー(文様彫刻)の3点一組。煙草入れと煙管ホルダーは紐で結束。	ラベル「シイクNo. 33」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
木製。筥部分に文様彫刻・有孔。柄の端部にネジ様の鎖形飾り飾付。	ラベル「シイクNo. 34」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
海獣形木偶(削り掛け付)。オットセイを10頭獲るごとに1つを祭壇に捧げる。	ラベル「シイクNo. 35」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
木製熊送用矢(赤布付)。薄黒着色した鎖に文様彫刻。	ラベル「シイクNo. 36」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
金属製耳飾り。端部に青玉付。	ラベル「シイクNo. 37」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
金属製耳飾り。布製の大形裝飾付。	ラベル「シイクNo. 38」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
木製。文様彫刻。刻印有り。	ラベル「シイクNo. 20」 「694」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
木製。クマ2頭を高彫した飾り板を重ねる。漆[飾り板: 黒朱(クマ)] 刻印無し。	ラベル「シイクNo. 21」 「695」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
木製。文様彫刻。刻印無し。	ラベル「シイクNo. 22」 「696」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
木製。文様彫刻。刻印有り。	ラベル「シイクNo. 23」 「697」	1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
木製。底部一部破損有り。		1966. 11. 27	椎久きみ氏	寄贈
綿木綿製。赤布・青布・白地手ぬぐいによる切伏文様有り。				
綿木綿製。赤布・青布・白布・水色メリンスによる切伏文様有り。椎久年蔵氏着用。	伝椎久家旧蔵	1963. 09. 02	古物商	購入 (10,000円)
綿木綿製。赤布・白布・赤地格子模様手ぬぐいによる切伏文様有り。	伝椎久家旧蔵	1963. 09. 23	古物商	購入 (5,500円)
ガラス玉製首飾り(大玉2個・鋼製シトキ付)。	伝椎久家旧蔵	1963. 09. 02	古物商	購入 (10,000円)
金属製耳飾り。裝飾無し。	ラベル「シイクNo. 39」			
椎久年蔵氏の熊撃ち用村田銃。銃身錆。		2012. 02. 29	椎久健夫氏	寄贈
椎久家旧蔵音声資料(30分53秒)。デジタル化したデータを寄贈。	原本(カセットテープ)は椎久家所蔵	2012. 02. 29	椎久健夫氏	寄贈

〔市立函館博物館所蔵「椎久コレクション」資料リスト凡例〕

- 「椎久コレクション原簿資料一覧」の欄には、1966年に椎久きみ氏から申し込みのあった寄附申込書附属の一覧表に掲載された「資料名」「数量」を、掲載順に表記してある。
- 「函館博物館蔵品目録」の欄には、1979年に市立函館博物館が発行した『市立函館博物館蔵品目録1民族資料篇』に掲載された「資料名」「数量」を、「椎久コレクション原簿資料一覧」に対応する順番で表記し、椎久きみ氏寄贈資料以外は『市立函館博物館蔵品目録1民族資料篇』の資料番号順に表記してある。
- 椎久16「刀綬」は、対応する資料が『市立函館博物館蔵品目録1民族資料篇』中に見いだせないため、「函館博物館蔵品目録」の欄は空欄にしてある。
- 「椎久コレクション原簿資料一覧」および「函館博物館蔵品目録」の「資料名」は、原則として掲載してあるままに表記してあるが、椎久27(民族0698)については『市立函館博物館蔵品目録1民族資料篇』上で「ひげべら(イクパシュイ)」と明確な誤表記であったため、「団子籠」と訂正して表記している。



椎久02：耳盥（民族0916）



椎久03：脚付丸行器（民族0922）



椎久05：椀（民族0928）



椎久09：椀（民族0862・0863）



椎久13：サイモン用具（民族0729）



椎久14：ピパ（民族0473）



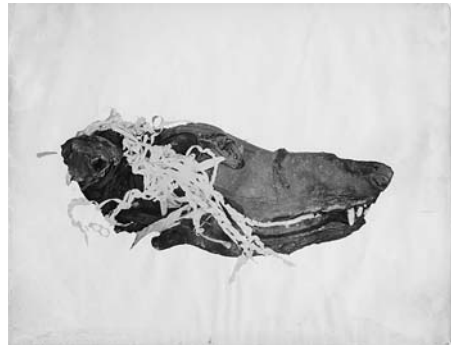
椎久15：鉾頭（民族0454）



椎久19：小柄（民族0823）



椎久20：蝦夷太刀（民族0788）



椎久25：狼写真（民族0001）



椎久26：煙草入（民族0964）



椎久28：数とり（民族0730）



椎久29：花矢（民族0699）



椎久30：耳環（民族0099）



椎久31：耳環（民族0100）



椎久32：酒箸（民族0694～0697）



色裂置文衣（民族0026）



色裂置文衣（民族0027）



色裂置文衣（民族0028）



椎久年蔵使用の村田銃（H23-159）

椎久年蔵（トイタレキ）氏のライフヒストリーと関連事項

日 時	年齢	事 象
1884年 5月 5日	0	北海道山越郡八雲村にて出生
1901年頃	17	集落の若者頭となる
1904年頃	20	日露戦争で満州に出征
1908年 2月 17日	23	前妻：ハツ氏と婚姻届出
1914年 7月 20日	30	椎久家の家督を相続
1916年 10月 27日	32	ハツ氏と死別
1930年 6月 16日	46	後妻：きみ氏と婚姻届出
1931年 8月 27日	47	北里闌氏が聞き取り調査で来訪
1932年 8月	48	先代首長イコトル氏死去、新首長となる
1933年 12月	49	犬飼哲夫氏に招かれて北海道帝国大学でイオマンテを執り行う
1934年 5月	50	北大の児玉作左衛門氏が八雲で発掘を行う（～7月）
1934年頃		自作の丸木舟を北大に寄贈
1935年	51	北大の名取武光氏に花矢を寄贈
1951年頃	67	長男：堅市氏一家が漁業のために道東へ移住
1955年 4月 30日	70	知里真志保氏と服部四郎氏が聞き取り調査で来訪
12月 10日	71	更科源蔵氏が聞き取り調査で来訪
1956年 3月 24日		更科氏が聞き取り調査で来訪
1956年	72	北村甫氏が聞き取り調査で来訪
1957年 2月		北村氏の聞き取り調査に東京へ招かれる（～3月）
1957年 6月 3日	73	北大に寄贈した丸木舟が国重要有形民俗文化財に指定される
1958年 3月 27日		北海道山越郡八雲町にて死去
1960年 4月	－	きみ氏が市立函館博物館に椎久コレクションを寄託
1966年 11月 27日	－	きみ氏が市立函館博物館に椎久コレクションを寄贈



1958年に八雲で撮影されたクジラ送りのワサ。最晩年の椎久年蔵氏が
【市立旭川郷土博物館1980:7】

